

嵯峨の襲@NAMIDA | 俺様狂 詩曲

tkbungei

嵯峨の襲@NAMIDA

空舗巢 斗路FEE

ニフ、ニ、

I 俺様 ファンタジー 狂詩曲

(一)神様あっ!!

この世界なんて、もうー。

城田^{しろた} 篠^{じょう}。X高校二年生。自称「非リア充」。高校でもそれなりに一っ端を気取ってるし、恵まれない家庭の中に居るわけでもない。ただ、この現実世界では、もう生きていけない気がする。現実世界なんて、平凡な俺を縛るためにある。そう自分に言い聞かせて、諦めていたのだ。

そんな日々ばかりめくって、気がつけば俺のコミ力は低下し、代わりに二次元に逃げるようになった。普通に考えて、今の時代ならこういう奴はそれなりにいるかもしれないが、今までうまくやっていたX高校では、次第に除け者になっていった。しかも俺だけ。もう諦めるしかない。嗚呼、「リア充爆発しろ」。いつの間にかこれが口癖になっていた。それでも、こういう奴は、今となっては多い、そう自分に言い聞かせて、全部無かったことにしていた。

けど、何だろう。諦めていた筈なのに、ベッドから崩れ落ちた布団にしがみついて、今更になって嘆いている。嘆いたところで、もうどうにもならないということは解っているのに、精神的にもうここまで追い詰められている。諦めている奴等とはもかく、ここまで追い詰められている奴は、俺ぐらいだろう。嘆きを通り越して諦めるどころか、それさえも通り越してまた嘆いている。考えているだけでももうわけわかんなくなってきたー。

あ〜っ、こういう時になんか救世主とかなんか来ないかな一っ、と思っていたら。

……。

俺は、爆睡していた。

「ん〜っ、あっ!!」

そして、目が覚めて、俺は急いで学校へ行く。

俺のゴミクズみたいな願いも叶わず、何の変哲もない一日が始まった。

いや、俺にとっては、そういう一日が一番つらいのだが。

教室に入っても、誰も気づかない。苛められているわけではないのだが、俺の存在感が薄くなっているのだ。

そんな日を過ごす度に、その晩にはバカバカしい奇跡を願っては叶わず、また同じような日が目の前に現れていた。

ラノベの世界だったら、こういう奴に救世主(?)が不意に現れるというのに、俺の場合は幾ら願っても現れてこない。いや、願ってるからダメなのかもしれない。救世主は、日常の中で現れるものであって、出現を願われてくるものではない。そう思って、所謂「孤独」な毎日をひたすらに通り返していった。

だが、幾ら経っても救世主は現れず、俺自身も変わってしまった。俺はこのままずっと孤独でいい、救世主が現れてくれるなら、と思っていたが、いつの間にか俺はまた高校に馴染んでいき、クラスはおろか、高校の人気者になった。そのせいか、俺のやる気も漲って、二次元から次第

に離れていき、代わりに勉強や運動、学校生活などに力を入れるようになった。それも、日に日に上達していき、成績も上がっていった。学校生活も充実して、自分でも信じられなかった。そして、女子からも注目され、今、遂に恋を告白されたのだ。

おいおい、これじゃ本物のリア充じゃねえか…。

自称「非リア充」は、この時呆気なく崩れ落ちた。

しかも、相手は高校入学以来、学年で一番可愛くて、俺自身も好きだった子だった。

これでもう、男子高校生の大半を敵に回してしまった。

お、おい、ちょっとまでよ。学校生活はまだしも、自称非リア充の俺が、いきなりリア充になった、いやなりそうだななんて、ありえないだろ…。

まさかと思って、自分の頬を抓ってみた。

あ…う、ウソだろ…。

……い……痛……

……痛くない。

本当に、夢だった。

と同時に、俺は夢から醒めた。

そ、そんな…。

自称「非リア充」は崩壊するが、やっぱり、夢から醒めない方がよかったか…。

でも、まあ、平凡だから…。

高二病だから…。

…しょうがないか。

「はあ…なっ!!」

なんと……授業中の居眠り!?

…てか、そんなのよくあることだけど。

「ったく…どこがしょうがないんだよ!!」

あ…。

言ってしまった…。

高二病に、中二病が混じる兆候。

「……うわああああああああああああああああああああっ!!」

…。

寢室。

「ダメだ……このままじゃ学校にいけない……不登校だあっ!!」

あの事件が、頭から離れない。

居眠りどころか、雄叫びだぜ…。

しかもよりによって高二病と中二病が同時に起こるなんて…。

いや、起こったような気がする。

...っつーか、何だか矛盾してるような気がする....。

自分が、特別な存在で、平凡だと...!?

まさか、俺って多重人格者!?

「.....うう.....そんな.....こんなつもりじゃなかったのに....。一体俺は何なんだ？誰なんだ？Who am I？もうだめだ...。訳が分からねえ....。

嗚呼、頼む！誰でもいいから、俺を現実世界から連れ去ってくれえ〜!!」

—その時、遂に救世主は現れた。—

(二)少し相談があります。

「ねえねえ」

見ると、そこには.....一人の幼女(?)。

どことなく巫女っぽい、可愛いロリッ娘である。

年は十四・五歳ぐらいか。

「...ん...あつ...おっしゃ、救世主だあつ!!」

遂に来たかつ!!

「待ってました、救世主!!」

「私は『がけばやしほのか 𪛗𪛗、さが のがさ 嵯峨ノ襲って呼んでネ♡」

「ありがとう.....って、何だよその名前! つか、ニックネームと本名逆じゃねえのか? 第一『𪛗𪛗』じゃ戸籍に乗らねーだろ?」

「え...? どっちでもいいや」

「ところで𪛗𪛗。お前どこから来たんだ?」

訊いてはいけない質問をしてしまった。

「え?...あ.....う.....くすん...」

ああっ、泣き出した!

「...くすん...助けて.....」

.....。

チキショー!

明るいキャラだと思ったら!

まさかの泣き虫かよっ!! くそっ.....世話が焼けるじゃないかあつ!!

意地っ張りで凶暴な奴の方がマシだったわ!!

...ったく、これじゃいつまで経っても平凡じゃないかあつ....。

と置いていたら。

「.....お兄ちゃん.....助けて.....ぎゅっ♡」

キタ—————!! 幼女の泣き顔だあつ!!

...いや...なんか...めちゃくちゃ可愛い!!

やべえ、心臓が止まりそうだけ.....。

...って、いつからロリコンになったんだよ俺!?

「まあ、しょうがねえな。『お兄ちゃん』とまで言われたらなあ...」

「いや.....篠は、本当の、私のお兄ちゃんだよ...」

「はっ? マジかよそれ。しかもなんで俺の名前知ってたんだよ。.....って、まさか.....」

...救世主が、俺の妹...!?

嘘だあつ!!

絶対にあり得ない!!

しかも、俺が妹に助けられるなんて....。

「やべえ、本物のロリコンになっちまいそうだ...」

「へっ?」

「え、あ、いや、何でもないよ。で、助けてって何だ?」

「いや...怖いの.....」

「へっ?」

「.....私を...苛めてくるの...」

「え...? なんかヤバい展開になりそうだな...」

—そこで、俺の記憶は途切れた。—

(三)別世界に旅してみた。

.....あれ？

透き通るような町に一人。

「\ (° 口 \) ココハドコ？ (/ 口 °) / アタシハダアレ？」

「あうう」

あ、ホノカもいた。

.....あ...あ...嗚呼....

「うわあっ、やべえ、この俺にロリッ娘がついてきたああ～!!可愛い、カワイイ、かわわわわいい!!俺の妹だあっ!!」

「きゃあ～っ?!痛いよお...」

「え?!い、痛いのか?!よしよし...やべえ、マジで可愛い...」

「くすん...きゃあっ?!お兄ちゃん!!怖いよお、う.....うえ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ん!!」

「なっ?!」

見るとそこには.....

「早速アリオウ」

.....という文字が刻まれた看板があった。

「.....ん？何だここは？」

俺は看板の示す、今にも壊れそうな骨董品屋に入る。

「ハァ、本当に世話焼けんなあ、いい加減泣き止めよ...」

「怖いよお、しくしくしく...」

「これ以上泣いてると、捨てるぞ」

「きゃあっ、そんな...う.....うえ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ん!!お願い、私を捨てないで...」

この瞬間、篠の何かが爆発した。

「...キター-----!!『私を捨てないで...』、キター-----!!やべえ、コイツ、ガチ過ぎる!!ガチ過ぎるロリッ娘じゃねえかあっ!!」

「...誰だコイツ...」

「へあっ?!」

「誰だ？」

「誰だ？」

「救世主だよ」

「「お前じゃねえ!!」」

「うえ～ん」

「一体何だよこの茶番...」

「つーかお前誰なんだよ」

「何ィ？」

「だから私は...」

「「うるせー」」

「うわ～ん」

「つーか誰なんだよこのロリ...」

「何ィ？」

「キター!!」

「見たか」

「何ィ？」

「やべえ、可愛い...」

「コイツ...憎しみで殺...」

「何ィ？」

「黙れ小僧!!」

「へあっ？」

「...この野郎死...」

「ホノカだよっ♡」

「...このヘタレ巫女くたばれえっ!!」

嗚呼。

言ってしまった、言ってしまった。

「え...う...うう...」

「ちょ、おま...」

「いや...こんなつもりじゃ...」

「...うえ~~~~~ん!!」

「あわわ...」

「はっ？」

「お兄ちゃん...」

「よしよし」

「う、羨ましい...」

「つーかお前誰なんだよ」

「うるせー」

「うわあ最低」

「何ィ？」

「いい加減自重しろよそれ」

「へあっ？」

そのままかれこれ一時間...

「ハア、俺は しろたじょう 城田條 。この世界を征服...いや、統一するんだ」

「統一？何だよそれ面白そうだな。つーか俺と同姓同名かよ」

「気色悪い」

「どこがだよ」

「知らんな」

「黙れ」

そこに。

「...ぎゅっ♡」

「うわあ!」

「どうだ」

「くそお、負けるも...」

「ちゅっ♡」

「負けました...」

この茶番はこうして幕を閉じ...

...この世界を統一することに決めた。

(四)マ○ンクラフト

「何だここ」

「俺らの世界だ」

「まるでマ○ンクラフトだな」

「正にその通りだ」

「...で、お前の拠点何処だ」

「...」

「お、おい...?」

「...ない」

「へあああああああああっ?」

「これからつくるんだ。」

「よし、任せとけ!!」

こうして、拠点造りが始まった。

「なあ、思ったんだけどさあ」

「ふへっ!!」

「これって、一度死んだら終わりじゃね?」

「...はい」

「ふへっ!!」

「嘘...」

「何だ、ウソだったのか」

「ハァ?」

「...嘘でしょ、死んだら終わりなの...?」

「ふへっ!!」

「やべえ、ヘタレ巫女...」

「ウルセエ(°Д°)!!俺の可愛い妹が、怯えているんだ」

「うえ~~~~~ん」

「へ...いや、ホノカ!そういう時は祓え、祈祷するんだあ~っ!!」

「ダメだ...泣き止まん...」

「巫女はただの中二病...」

「いやいやいや!ホノカは巫女っぽいだけだ!!」

「お兄ちゃん...怖いよお...しくしくしく...」

「世話焼けるな...。でも可愛いからなあ...」

「つーかさっきからずっと泣いてなかったか?」

「つーかホノカももう十四・五歳だぜ?もう幼女卒業しちまうよ...」

「いや...私は十五歳だよ...」

「やべえ!!」

「もう限界じゃないか?」

「いやいやいや!見ろ!!俺に抱きついて...いや、這いよっている限りホノカは永遠に幼女だあっ!!」

「ホー。それに幼女特有の可愛さもあるからな。いや本当にお前の妹みたいだな」

「いや、本当の妹だあっ!!」

「いやあ~っ!俺にもこういう妹欲しいわあ~」

「あ、ホノカは俺の救世主だからごめんな」

「え?!...まあいいか。ホノカはどうせヘタレ巫女...」

「ウルセエ(;°Д°)!!」

こうして...

...拠点が完成した。

「ふう...。」

「...お兄ちゃん、凄い!!」

ホノカの可愛すぎる笑顔を、篠はこの時初めてみた。

いつも泣いてばかりだから、笑顔を見ると、思わず興奮してしまう。

「ありがとう...」

「てへっ♡」

ホノカの会心の一撃！

これでは兄もたまらず興奮してしまう。

「.....ありがとう!!ホノカは俺の最愛の妹だっ!!現実世界でギリギリまで苦しんでいた俺の願いを、遂に叶えてくれた救世主だっ!!俺には、ホノカ以外に失って困るものなんてないんだっ!!ホノカ、本当にありがとう!!」

「...ごめんな。ホノカのこと、ヘタレ巫女とか言って。俺も、ホノカに出会えて、何かが、俺の中の何かが変わったような気がする。ホノカには、特別な力が宿っているんだ。ホノカ、本当にありがとう!!」

「...ありがとう、お兄ちゃん。ぎゅっ♡」

「えへへ、可愛いなあ...」

「おい、ちょっと待て。俺は？」

「條は、ホノカに負けたんだろ？」

「君～、帰れ」

「ウルセエ(;°Д°)!! (笑)」

そして、俺達の長い旅が始まった。

(五)LEGEND STATUS

「ほげえ～」

「何だここ。俺も見たことないな...。」

「...怖いよお、お兄ちゃん...うえ～ん...うえ～ん...」

「大丈夫だ。心配するな。俺達がついているからな」

「お前が助けられたくせに」

「ウルセエ(;° ㏒°)!!」

目の前に現れたのは...

...ただの家だった。

「ふへっ!!」

「お前の『ほげえ～』、何だったんだＹＯ！」

「お前見たことねえのかＹＯ!!」

「つーかこのどこが怖いんだＹＯ!!」

「知らねえよ」

「知らんな」

「ウルセエ(;° ㏒°)!!」

「黙れ小僧!!」

「ウルセエq(° ㏒°)」

「「何ィ？」」

「す、すみませんでした...」

「「つーかお前誰なんだ...ええ!!」」

.....見るとそこには。

「.....よくもやったわね!!」

「ハァ？」

「何だとお？チビのくせに...」

バシィィィィィィ!!

平手が條へ....。

「痛ってえ...何してくれるんだオイ！」

「.....よくも言ったわね!!」

「チビに言われたくねえな!!」

「あんたバカあ？私のどこがチビなのよ!!」

「お前、ホノカよりチビじゃん。」

「ホノカあ？誰それ？」

「篠。教えてやれ」

「あの弱腰巫女のこと？」

「ウルセエq(° ㏒°)!!お前こそ弱腰のくせに、よくも...」

「あんたバカあ？私のどこが弱腰なのよ!!」

「あんたバカあ？『す、すみませんでした...』とか言ってたくせによお？」

「...お兄ちゃん...やっぱり怖い...うえ～ん...うえ～ん...」

「ハァ？まさかこの私にケンカ売ってんの？」

「てめえ、馬鹿か!!」

「チビのくせに勝てるわけねえだろ!!」

「ハァ？私を舐めてるの？」

「き、きゃあっ!!怖いよお、私を苛めないで...い、痛い!!」

「ヤメロオッ!!さては俺の妹を殺す気か!!」

「ハア?あんたの妹だったの?」

「やべえ、チビがホノカを襲ってる...すげえ」

「ウルセエq(°Д°)」

「痛い痛い痛い!きゃあっ!!血、血が!!死んじゃうよお、助けて、お兄ちゃん...」

「てめえ、マジで俺の...いや、俺達の救世主を殺す気か!!」

「ハア?この弱腰巫女のどこが救世主なのよ?」

「黙れこのド畜生めが!!あ、おい銃取るな!殺したら殺人罪になるんだぞ!お前サツに捕まるぞ!お前にそんな覚悟があるのか!!」

「佐津って誰よ?異次元語?」

「日本語だあっ!!」

「ちょ、おま、張り合っても無駄だぞ(;°Д°)。この世界には警察はいないんだ。というかこの世界はそんなに平和じゃないんだ」

「そうよ!あんたみたいに甘えて生きてる異次元人じゃないのよ!!」

「何だとお?だったら何をやってもいいんだな?よし分かった!お前を殺してやる!!」

「ハア?異次元人にこの私を殺せるとでもいうの?これでも?」

バシューウッ!

今度は篠が、鼻血を吹きだして飛んでいった。

「痛ってえ...何をしてくれるんだオイ!」

「これでも私を殺せるの?」

「...何...だと?」

この時、篠は妹を助けられない悔しさと、妹を助けられない自分の無力さ、そして、妹に対しての情けなさ、恥ずかしさを、いっぺんに味わった。

篠の怒りゲージは、この時満タンになった。

「...野郎、ぶっ殺してやるっ!!」

「ハア?私は野郎じゃないわ、乙女よ!あんた、失敬にも程があるわ!!」

「ウルセエ!お前が乙女を名乗るなんて十年早いんだよっ!!」

「もう一度言うけど、私はチビじゃないのよ!!」

「そんなもん知らねえよ!第一乙女を殺す奴は乙女じゃねえ!!」

「残念だけど、この世界は異次元とは違って乙女はそんなに気優しくないのよ。むしろ臆病なホノカこそ乙女じゃないじゃない!!」

「お前は...」

そして篠の口から出てきた言葉は。

「...誰だっけ?」

「ハア?この私の名前も知らないの?まあ、異次元人だからしょうがないね。私は宝^{ほうじんゆずき}神柚葵よ!漆黒の翼よ!!」

「漆黒の翼?中二病かよ」

「あんた、何考えて言ってるの?」

「中二病の言ってることは、俺には分からねえんだ。ごめん」

「厨二病?異次元語で誤魔化すつもり?」

「何言ってるのかわかんねえんだよ!!」

「ハア?何ほざいてんの?あんたが聞いたことじゃない!!」

「大体お前一言余計なんだよ!!」

「言葉を慎みなさい!あなたたちは漆黒の翼の前にいるのよ!!」

「「中二病に威厳なんてねーよ」」

「この有様を見ても?」

見ると、ホノカはユズキの前に倒れていた。

いや、これじゃあ斃れたといっても可笑しくない。

「貴様あっ、何をしてくれるんだあっ!!」

「ふふ。もう手遅れよ。あんたの妹はもう...」

「冗談じゃない.....冗談じゃない!!」

「叫んだって無駄よ。これが漆黒の翼...」

「桎梏の翼？何のことかわからないなあ？」

「ダメだ...記憶から抹消しようとしてる...この偉大なる漆黒の翼を...」

「お前が暴れまわってるだけだろ。威厳なんてねーよ」

「甘えて生きてるあんたに言われたくないわね」

「この俺にも、吐き気のするような悪は分かる」

「ハァ？だから何よ」

「俺はお前を許さない」

「ハァ？私を悪だというつもり？この銃で一発お見舞いしてやるわよ」

「かまわない。ホノカのためなら、この命など」

「ちょ、おま、何を考えてるんだ！現実を見る、ホノカはもう死んでるんだぞ。お前が死んだ時点で、終わりだぞ」

「俺は現実から逃げ出すためにここに来たんだ!!」

「なるほど。あんたがどれだけ甘えて生きてきたか、よく分かったわ。現実を見せてやろうじゃないの」

そう言ってユズキが篠に向かって発砲しようとしたその時だった。

「ハァッ！」

呪文も唱えずに出てきた声。

一瞬の出来事だった。

気が付いたときは、少し前までのホノカの如く、ユズキが倒れていた。

「嗚呼、死んだかと思った...。って、ホノカ！俺たちを助けてくれたのか!!」

「中二病かと思ったら、本当だったんだな...」

「うん！お兄ちゃんのためなら、何でもするよ!!救世主だもん。お兄ちゃんが大好きだから!!ぎゅっ♡」

「ありがとう...いやあ、可愛いなあ...」

「ちょっと！私は何度でも蘇るわよ!!」

「って、まだ生きていたのか!!」

「当たり前でしょ？でも正直死ぬかと思ったわ。あんたたちの仲間になってあげる」

「え?!い、いいのか?!」

「当たり前でしょ？ホノカと戦うと、色々面倒だから」

「そうか。ホノカは本物の巫女だからな！」

「あとひとつ、言っておきたいことがあるんだけど」

「「おう、何だ？」」

「...さっきは、ごめんね」

「大丈夫だ。ホノカはとても優しいし、ホノカは俺達を守ってるから」

「お前が助けられたくせに」

「ウルセエ(;° ㏒°)!!(笑)」

「...というわけで、よろしくね」

「何だか急に優しくなったな」

「...ユズキちゃん。弱虫の泣き虫だけど、よろしくね。ぎゅっ♡」

「きゃっ...ホノカって、すごく可愛いじゃない。篠って、幸せ者ね」

「いやあ、照れるなあ...」

「お前、さっきまでユズキのこと罵ってたくせに」

「ウルセエ(;° ㏒°)!!(笑)」

こうして、宝神袖葵が、仲間として加わった。

(六)篠崎八神

何故だ？

どうしてホノカと関わると、こんなにも優しくなるんだろう。

可愛いだけじゃないのかもしれない。もしかすると、ホノカは…。

本物の巫女の魂を受け継いでいるのかもしれない。

いや、ホノカが本物の巫女だということは分かっていたけれど。

俺は、その答えがわからないでいるのだ。

とか考えているうちに、俺達の拠点に着いた。

「す、凄い…」

「これ全部、篠が造ったんだ」

「嘘でしょ」

「本当だ」

「ゆとり世代の割には、ガッツあるんだねえ」

「ウルセエ(;°Д°)!!(笑)」

確かに、凄かった。

見た感じ大きくて、地下には炭坑もある。

素晴らしくて声も出ない。

これは流石に篠も一瞬夢かと思った。

「…僕には…特別な力が」

誰も否定できない。

俺の…唯一の取り柄だ。

これなら、あの可哀想な妹も助けられるかもしれない。

「てか篠。この世界征服して何かいいことあるのか？」

「…」

「もう『ない』とは言わせないぞ」

「勿論あるさ」

「何だ？」

「…」

「お、おい…？」

「…ない」

「おい!?嘘だと言ってくれっ!!」

「嘘だ」

「何だ」

「さっきも言ったが、この世界はそんなに平和じゃないんだ。だから、この世界を統一して、この世界を平和にするんだ」

」

「なるほど」

「魔術とか封印しないと、色々面倒だから」

「よし、俺は、仲間とともに、そして救世主を守るために、世界を平和にするために、出陣するぞ!!」

そして、俺達の長い旅…が続く。

「待ってよ。もしもこの世界が平和になったら、私達、あんたみたいになっちゃうってこと？それは困るわ」

「うっさい黙れ！」

というその時だった。

「ハァッ！」

呪文も唱えずに出てきた声。

気づけば、目の前には、男が倒れていた。

「...誰だ？」

男は立った。

「くっ...傀儡など、今度は効かぬぞ、さらばっ」

「...傀儡？」

何...だろう.....。

ホノカが.....傀儡を...？

「...傀儡って...巫女が授かっていたのか？」

「...ホノカは、他の巫女とは明らかに違う何かがあるみたいだな」

「で、アイツは一体誰なんだ？」

「アイツは、この世界の東方の勢力者の築瀬詩風さ。俺達にとってかなりの強敵だけど、ま、統一までまだ程遠いから、今は歯向かわない方がいいだろう」

「この世界に於いて、勢力はたくさんあるからね」

「まるで戦国時代だな」

「ねえ...お兄ちゃん...」

「ん？何だい？」

「私には、仲間がいるの」

「仲間？俺達は仲間だろ」

「そうだけど...私には、その...八人の仲間がついているの。お兄ちゃんを守るために、この世界に跋扈する勢力を、仲間と一緒にまとめていくの」

「ユズキとか詩風も、そうだったのか」

「うん。仲間とだから、攻撃が効かない人も多いけど」

「そうか...仲間って、傀儡のことか？」

「いや。人間だけど、皆にはどうしても『傀儡』って呼ばれちゃうの。封印を解かない限り、私以外見えないから」

「なるほど。誰から授かったんだ？」

「お兄ちゃんから」

「ええ!？」

「そう。『しのぎきはちじん篠崎 八神』って呼ばれてて、あらかわゆう新河幽、おがさわらゐ小笠原瑠依、かんざき さら神崎 幸来、しんじょうさつき新庄 皐月、たけみやなみ嶽雅奈巳、にのみやまい新宮磨伊、はちのめめぐり盆ノ萌幹、りんどう竜胆 レナの八人なの。皆可愛くて、優しくて、篠のことが大好きなの」

「聞いたことないなあ...。皆強いのかってというか、俺のことが好きだって!？」

「強いというか、それぞれタイプがあって、攻撃に合ったタイプを持つ仲間が攻撃するって感じ。例えば、ユズキちゃんだったら瑠依ちゃん、詩風だったら...誰も効きそうになかったけど、幹ちゃんかな」

「なるほど」

「皆、お兄ちゃんの味方だよ。『篠くんって、他の誰よりも優しくて、私達みたいな哀れな人を誰よりも愛しているの？こんなに哀れな人って、愛されるはずなのに...。早く篠くんに会いたいなあ...』って、私も皆も言ってたから」

「俺ってそんなに優しいのか？まあ、言われてみればそうだろうけど」

「もちろん!!」

「ま、誰かを守る為だったら、あんた命懸けても立ち向かうからね。その通りだと思うわ」

「俺って、可哀想な娘達にやけに好まれるなあって思っていたけど、そういうことだったのか...俺は、そういう娘を見ると、助けてやりたい、手を差し伸べてやりたいっていう感情が湧き起こるんだ。ああ、何だか俺も皆に逢いたくなってきたな」

「皆弱虫で泣き虫だけど、篠を守るためだったら何でもするよ。でも今、篠が側に居なくて泣いているの。いや、篠はいつも私の側に居るんだけど、篠には見えないし、皆も篠が見えないの。見える方法はあるんだろうけど、まだわからないの。放っておくと死んじゃうから、早く方法を見つけないと」

「え？俺から授かったんだろ？俺も仲間も見えないってどういうことだ？」

「お兄ちゃんの中だと、封印されていたみたいなの。詳しく言うと、『篠崎八神』は総神である『こうけつどうじん 瀨瀨 道人』即ち篠に守られていたんだけど、何者かによって封印されたみたいで、『瀨瀨道人』の妹の私にしか操れなくなって、それで私に授けられたの。あの後、封印した誰かに苛められたの」

要するにホノカは、篠が救世主の登場を願い始めた頃に『篠崎八神』を授けられて、苛められた後に篠の下に現れたということだ。

「多分、私のこの勾玉の中に居ると思うわ。封印を解けば、仲間に会えるみたい」

「そういえば、ホノカ、俺が作った勾玉を持ってるな...」

「特に封印が強いのが幹ちゃん、場合によっては、幹ちゃんだけ解けないかもしれないの。幹ちゃんは、生まれつき身体が弱くて、皆の中でも特に弱虫で泣き虫なの。実は酷い虐めに遭っていたらしくて、本当に可哀想な娘なの。篠に会えないと、非業のまま死んじゃうの。頑張ってみるけど、正直、篠と幹ちゃんが会うことは不可能に近いの...」

必死に語るホノカは、気づけば涙が涸れるほどに泣いていた。

「そうか...。幹に会えたら真っ先に可愛がるだろうな」

「あ、そういえば、幹ちゃんも『もし篠くんに会えたら、私を思っきり可愛がって欲しいなあ。私、虐められてばかりだから...篠くんは、こんな私を守ってくれる、唯一無二の存在だから...皆、私のこと超可愛いって言ってくれてるのに、誰からも愛されずに、虐められるなんて...死ぬ前に、一度でもいいから、篠くんに可愛がってもらいたい。私も、篠くんも、それが一番幸せだと思うの。どうせ私は、殺される運命だから...』って言ってたよ。皆の中でも一番可愛い娘だから、お兄ちゃんも気に入ると思うわ」

「そうなのか...。こんなに俺を思っていたのか...。まるで高嶺の花だな...よし、この世界を統一していくうちにわかるだろう。待ってろ、皆！」

「ホー。何だか急にやる気出たみたいだな」

「異次元人って、正直馬鹿にしてたけど、仲間を守る為なら、何でもするっていう優しい人だったのね。いや、篠だけかもしれない。この世界には、そんな人はまず居ないわ。...それにしても、ホノカの仲間って、気になるわね。幹ちゃんに会ってみたいな」

—その時、次の戦いは起こった。—

「早速アリヨウ」
いつか見た看板だが一。
その看板は何処にも見当たらなかった。
そこにいたのは、一人の戦士だった。
「こ、怖いよお、お兄ちゃん...う...うえ～ん...」
ホノカがベソをかきながら篠に抱きついた。
「あれ？『篠崎八神』はどうした？」
「...どのタイプも効かないみたいなの」
「え？どういうことだ？」
「...『篠崎八神』が、一斉に泣き出したの」
「何だって?!」
「特に、幹ちゃんが制御不能になっちゃったの」
「封印が固くなりすぎて、ホノカの手にも負えなくなったってことだな...」
「マジか...」
沈んだ雰囲気の中、戦士は嗤った。
「何だか可哀想だな。よし、いいことを教えてあげよう」
「「何だ？」」
「これから、お前らの八人の使者を一人ずつ殺してあげよう」
「「な、何だって?!ふざけるなあああああ!!」」
「ふざけているわけではない。そうして全員を殺せば、『瀨瀨道人』の呪縛も解ける筈だ。でも、一度に全員を殺すのも可哀想だから、ということだ」
「「俺達の仲間に出すなあっ!!」」
「もうお遊びは終わりだ。最初の ^{ターゲット} 標的 は『悌』の竜胆レナか...」
「なあ!ど、どういうことだ?ホノカ?」
「『篠崎八神』は、八つの珠を持っているの。『仁』『義』『礼』『智』『信』『忠』『孝』『悌』の八つ。この調子でいけば、竜胆レナ、小笠原瑠依、嶽雅奈巳、神崎幸来、新庄皐月、新宮磨伊、新河幽、最後に盆ノ萌幹っていう順番で殺されちゃう...」
「ええ!ホノカは大丈夫なのか?」
「フフ...。七人は東方の詩風に殺させて、最後の幹は...可哀想だが、北方の私が殺そう。あわよくば灰戈も殺してあげよう」
「くそっ...コイツ、東方と手を組んでいたのか...」
「大丈夫だ。七人は詩風だから殺されると思うが、私は女の子が苦手だ。最後の幹は可愛いから、殺せないかもしれない」
「うう...私も殺されるの...?怖いよお...お兄ちゃん...うえ～ん...」
「よしよし...大丈夫だ。俺達がこの殺人鬼を止めれば...」
「フフ...。できますかな、貴様如きに...」
「俺は、仲間のためだったら、何でもする!」
「くすん...随分貢献的な神ね...」
「よし、分かった!それでは、戦いの始まりだ!!」
「もう戦いは始まっているんだ!!」
「おいおい、何を言い出すんだ條!」
「俺達は仲間だろ!!」
聖戦、即ち平和の争いは、この時口火を切った。

「でも...まあ、俺の居た現実世界よりは断然いいな」

(八)スザンナ

俺達は今拠点に居る。

如何に『篠崎八神』を死なせずに、この世界を統一できるか。

このままずっと拠点に籠っていたら、『篠崎八神』が、一人、また一人と死んでしまう。

その時だった。

「まずい！俺達の噂を聞きつけた南方の勢力が、俺達の西方に攻め寄せてきたぞ!!」

篠が叫んだ。

「誰だ!!」

篠が叫んだ。

拠点の外に出ると...

「誰だとは何だ！我等はこの世界を統一する一族だっ!!」

「何だとお？この『篠崎八神』にやられたいようだな」

「...ごめん...『篠崎八神』は、詩風に奪われちゃったの」

「ええ!」

「いや、勾玉に八つの珠があったんだけど、それが八方に行っちゃったの。だから、この勾玉を持って...」

「お？ソイツは誰だ？」

「お、俺の妹には、俺の救世主には、絶対に手を...」

「さらばだっ」

一人が篠からホノカを攫うと、一族は颯爽と行ってしまった。

「お、おい!ちょっと待てえ！」

でも、神速に追いつけるはずもなく、一族は彼方へ消えていった。

「くそっ...」

篠が諦めかけたその時、

「ここは私に任せて！」

いきなり叫んだユズキが、一族にも負けない神速で追いかけた。

「あっ、ちょ、おま、待てっ」

篠が慌てて叫んだ。

「大丈夫だ」

篠が珍しく落ち着いて言った。

「ユズキにはホノカを取り戻してもらおうとして、俺は『篠崎八神』の死を食い止める。一人でも欠けると、その時点で既に『篠崎八神』じゃないからな。篠は...この拠点を守っていてくれ」

「え？い、いいけど、どうやって食い止めるんだ？」

「確実には分からないけど、この勾玉と八つの珠に鍵があるはずだ。じゃあまた」

「お、おう。幸運を祈る」

篠は、走り出した。

「篠...この世界に来ると、やる気が出るんだなあ。俺とは違うな。...それにしても...」

南方の一族やユズキとは違い、篠は神速からかけ離れて遅かった。

「これで大丈夫か...？」

心配気味に、篠が呟く。

「ああ～っ！この世界でも俺のスピードは相変わらずなのか～っ!!」

すかさず篠が、窓の外で叫んだ。

(九)ULTRA SOUL

そんな篠とは違って、神速の如く疾走するユズキは一。

「ハア、ハア、追いつけない...」

「...ユズキちゃん...助けて...うえ～ん...」

「...か...可愛い...今すぐ行くからね！」

そんな風に、諦めかけては、ホノカの涙が溢れた瞳を見て、諦めきれずに追いかけていた。

「篠の妹かぁ...本当に幸せ者なのね、篠って...きゃあっ!」

ホノカを攫った南方の一族の行く先は、東方の、詩風の前だった。

「え?...ど、どうなってるの...?」

南方の一族は、詩風と相談を始めた。

「西方の尸囃仄戈を捕らえて...」

「実は私も北方と手を組んで、『篠崎八神』を捕らえてきたところだ。彼女達の封印を解くために、これから処刑する」

「『篠崎八神』とは...」

「突如として現れた、西方の守り神が連れてきた八人の神々だ。皆ホノカ並みに幼いが、八種の能を持っていて、かなり有能らしい。本当は私が封印したのだが、盆ノ萌幹の様に封印が解けなくなった者もいるみたいで、西方を滅ぼすためにも、処刑することに決めた」

「西方の守り神...この宝ほうじんへいじ神幣司に、倒せるだろうk...」

「宝神...幣司!」

その言葉が、ユズキの頭を過る。

「西方の守り神、即ち『纈纈道人』は徳の持ち主らしく、倒すことはできると思うが、『篠崎八神』の封印が固くなって、殺すことができなくなるかもしれない。十分に気を付けるように」

詩風の言葉は、すぐに飛んでくる。

「い...苛めないで...うえ～ん...」

「お、そなたは『纈纈道人』の妹であったな。私の封印の効かないそなたが、彼の『篠崎八神』を操るとは...だが、『篠崎八神』の死はもう目の前だ。そなたにももう操れない。これから竜胆レナが処刑される。黙って見て居れ」

「え...あぁっ、レナちゃん！」

見ると、小さなレナが詩風の前で泣いている。

「刑吏は、この私だ。大丈夫だ。すぐに永遠に眠れるからな」

「そんな...いやっ、死にたくない、死にたくないよお...篠くんに会えるまでは...うえ～ん...うえ～ん...」

レナは、金髪を揺らして、泣き続けていた。

詩風は、懐から匕首を取り、レナの白くて細い首に当てた。

「ここは落ち着くんだ...可愛い...殺すのには惜しいが、これは三方勢力の統一のためだ」

「私が死んだら、皆はどうなっちゃうの...?」

「大丈夫だ。仲間も一緒に死ぬのだ。そうすれば、皆一緒だ」

この有様に、ホノカは、

「きっと、『纈纈道人』が、お兄ちゃんが守ってくれるはず...」

と信じていた。

「このままじゃレナちゃんが殺される...篠!お願いだから、助けて...」

ユズキも願っていた。

更には…。

「だ、誰だ!!」

「私は、北方の私だ。 さんじょうあきら 三条景 だ」

「な、何しに来た!!」

「ちょっと伝えたいことがあって来ただけだ。決して西方を落とすに來たのではない」

「は、話とは何だ」

「今、竜胆レナが殺されようとしている。それだけだ」

「そ、そんな…『篠崎八神』が死んだら、『瀬瀬道人』は終わりじゃないかあっ!!お願いだ!お願いだから、篠、レナを助けてくれ!!頼む!!」

拠点の護衛についていた條も。

たとえレナを救えたとしても、次は瑠依、奈巳、幸来…と、殺されていくのだ。

最初は、皆本気で願っていた。

「あと、もう一つ言いたいことがあるのだが…」

「な、何だ?」

景の耳打ちで、とんでもない言葉が飛び込んできた。

「西方は、三方から攻められているわけではない。我等北方が、密かにだが、西方を支援している」

(+)EIGHT JEWELS

「おい、何をしてくれるんだ俺。暴走して、一体何をやってんだ」

広がる霧の中、助けようと急ぐ自分を落ち着けようと必死だった。

百メートル先までしか見えないような、濃い霧だ。

その少し向こう、幽かに黒い塔が見える。

「えっと、確かホノカが『勾玉に八つの珠があったんだけど、それが八方に行っちゃったの。だから、この勾玉を持って...』って言ってたな。恐らく、その八つの珠を捜して見つける、ということだな」

いきなり窮地に追い詰められている今日の篠は、かなり冴えている。

「...で、その八つの珠は一体何処にあるんだ？」

ただ、迷い出した自分を急かそうと構えるのも、今日の篠だ。

「待てよ、ここは落ち着くんだ。『この勾玉を持って...』っていうことは、この勾玉に何か鍵があるんじゃないか？」

再び平静を取り戻した篠は、手元の勾玉を見詰める。

ただただ、じっと見詰めるだけである。

「...でも、これじゃ勾玉を見つめることしかできないぞ...やばい、このままじゃレナが殺されちまう...ホノカが言いたかったのは、勾玉に鍵があるのか、それともただのお守りなのか？これはホノカの勾玉だ。これはホノカが持っているべきものだ...いや、待てよ。敵に手を出されると覚悟して、この勾玉を守るように俺に預けたのか？とにかく、俺は今こんなことをしていいのか？」

篠の心が、激しく揺れ動いたその時だった。

「...んっ？」

水色に透き通る勾玉に、何かが浮かんできた。

「お兄ちゃん。気付いてくれたの？」

「え？ホ、ホノカ？」

「ごめんね。勾玉を見てるでしょ？」

「え、あ、う、うん。レナは今どうなってる？」

「あ、レナちゃんは...分からないわ」

「そうか...。で、八つの珠ってどうなってるんだ？何処にあるんだ？」

「あ、そうだった。お兄ちゃん、今何処にいる？」

「え？...それが、霧が濃くて分からないんだ」

「そう...レナちゃんの『悌』の珠は、仙寿塔にあるの」

「センジュトウ？ああ、黒い塔なら、向こうにあるよ」

「え？本当？だったら、それが仙寿塔だけど...」

「マジかっ！その塔の頂上にあるのか？」

「え？いや、その塔の麓にあるの」

「よっしゃ！何ならすぐに行けるぜ!!」

「あ、そうだ。珠を見つけたら、私の勾玉に...」

「え？何だって？」

「だから...その...『悌』の...たm...」

「ど、どうした!?ホノカ？」

「...」

そこで、勾玉に浮かんでいたホノカが、消えた。

「ん...あ、そうか。あの向こうの黒い塔、仙寿塔にある珠を見つけたらいいわけか。その珠は、確かこの勾玉に...あれ、どうするって言ってたっけ？確か聞こえなかったな...まあいいだろう。この勾玉に、この珠を、ということだな。よし、待ってるよ、レナ!!」

あてを見つけた篠は、仙寿塔目掛けて走り出した。

霧の中だから、近いと思っていた。

だが。

「ええ!?ど、どうなってるんだ...?」

川沿いを走っていた篠は、とんでもないことを知ってしまった。

崖の下の、滝の側に、仙寿塔があるのだ。

「...何だって!?塔の麓はこんなところにあるのか!?嘘だっ!!まさか、こんな俺に滝を降りろというのか?無理だ...」

川の先は、滝である。

珠は、この滝の下にある。

「くそっ...珠を見つけなければ、レナを助けることが出来ない。でも、俺にはこの崖から飛び降りる勇気がない。回り道をすれば、その間に殺されちまうかもしれない...どうすればいいんだ...」

もう、迷っている時間はない。

「俺って、まだ高校生なんだけどな！」

自分とレナの生死を左右する決断を、下さなければならない。

『篠くんって、他の誰よりも優しく、私達みたいな哀れな人を誰よりも愛しているの?こんなに哀れな人って、愛されるはずなのに...。早く篠くんに会いたいなあ...』

「これは、皆のためだあっ！」

一吠えして、篠は滝の中に消えた。